

不登校・ひきこもりの子供支援に関する政策評価に係る研究会(第3回)

議事概要

1 日時：令和3年6月18日(金)10:00~12:00

2 場所：WEBによる開催

3 出席者

- ・ 構成員 堀田座長、伊藤構成員、古賀構成員、芹澤構成員、深谷構成員
- ・ 総務省 評価監視官(財務、文部科学等担当)室

4 配付資料

- ・ 研究会報告書の素案について

5 概要

(1) 事務局から、研究会での議論をまとめた報告書の素案について説明し、意見交換が行われた。主な意見は以下のとおり。

- 基本的に、ロジックモデルはこのような方向性で良いと思う。不登校という出来事があっても、自分が望む将来の進路への担保ができているかどうか大きい。文部科学省が行った調査結果を見ると、不登校体験をネガティブに評価する人が全体の30~40%と少なく、その理由には自分の時間を使って将来どうあるべきか考えられたこと、悩みごとを話す相手が見つかったこと、学習の機会が得られたこと等が挙げられている。そのような点では、そういった人々が望む様々な進路に必要な対人関係や学習の要素が担保できていることがあれば、アウトカムとしてみるのは良いと思う。
- 地方では、不登校児童の居場所の選択肢が少ない面があるが、最近ではeラーニングによって対人関係や学習の要素を取り入れようとする試みが行われており、居場所や教育機会の確保を広いものとして捉えることができる。
- 内閣府では、連携支援を推進しているが、不登校の場合は、初発が学校なので、学校が連携のための仕組みを持っていなければ、スタートラインに立てない。一部の高校では、特別支援教育コーディネーターを校内に置き、連携している。こうした架け橋人材を置くことで、チーム学校によるアセスメントが機能するものだと実感し

ている。こうしたものも取り入れて、中間アウトカムの流れ図となれば、効果が実際に繋がる話になると思う。

- 不登校児童には連続型というずっと不登校になっている者と、不連続型という学校への出欠を繰り返す者の両方があって、特に不連続型の児童については特別支援教育コーディネーターがしっかりと対応することで効果が上がっているという話を聞く。連続型の児童は、学校にとって改善の対象になりにくいという現状があるが、不連続型の児童について様々な進路に導くことができるという特別支援教育コーディネーターの役割はとても大きいと思う。
- 資料 5 ページの中間アウトカムの③と最終アウトカムが矢印で繋がっていることについて、その前後を含めて最終的なアウトカムということなら、単なる時系列ではないと思う。しかし、中間アウトカムの③の「進路」が進学や就労といった長いスパンでの目標を意味するなら、時系列的な印象となり、ズレが生じているように思う。このため、ここでの「進路」は次の進学先といった意味ではなく、より広く捉えた「進路」だという注釈をつけると理解が深まると思う。
- 特別支援教育コーディネーターの動きや力量は学校の初動を決める要素だと思う。小中学校でも特別支援教育コーディネーターを置く動きはあるが、専門性や経験を持った人がそういった役割に就けるようなシステムをいかに作るかが課題だ。また、小中学校の教員が学校に教員としての籍を置きながら、適応指導教室に2~3年出向し、不登校児童の支援の経験を得た後、教員として復帰するという取組を行っている県もあり、こうしたシステムを同時に作っていただけると良いと思う。
- ロジックモデルの流れはよいが、ロジックモデルが意図する方向を誰もが理解しやすいように、「主語」が誰なのかということを明確にしておいたほうが良いと思う。誰がどのように行うのか、もしくは誰がどのような状態になっているのかということを理解できるようにしておくことが、ロジックモデルを推進する上で必要だ。
- 最終アウトカムはある種の目的であり、ロジックモデルはそこに至るまでの道筋を示しているものであり、その流れを具体的にどのように把握するかが重要だと思う。
- この難しいトピックについて政策評価を始めること自体に意義があり、またそれにあたってロジックモデルを作ったことに大きな意味がある。今回を入り口として、最終アウトカムをどう評価するのか、ロジックモデル自体を検証する、ということ

今後残されている課題として継続的に議論する機会が必要だ。帰納的、定期的に検証することで、どのように、誰が、どのような指標、手法で評価すればよいのかより詰めていくことができると思う。

- 未成年の中学生の場合、本人のみでなく、保護者もかなり当事者性を帯びており、進路の選択や検討に関わっている。そうしたことから、内閣府でもアウトリーチ支援を進め、家庭支援に方向を変えようとしているので、家庭や保護者の要素についても検討してほしい。
- 色々な事例を見ていると、不登校の原因分析では、色々な要素を提示して、その中でプライオリティの高いものからチェックし、一定の支援策を検討して、うまくいかなければやり直すというフィードバックループを行っていることが多く、本人について何回も繰り返し検討されていくこと自体が、非常に重要になっている。
- ロジックモデルをあまり複雑にするのは良くないが、フィードバックの要素を念頭に置きつつ、ロジックモデルの並べ方、表現の仕方について考えた方が良いと思う。
- 不登校の原因について、学校側から見ると家庭の要因が大きいとする一方で、家庭から見ると本人の身体的な不調や学校側の問題だとしていて、ずれが生じているのではないかと感じている。不登校で悩んでいる渦中にいる時には分からないが、5年ほど経ってから考えると要因が分かることもあり、原因分析をどこまでやったらよいのかについては慎重な検討が必要。
- 学校や支援者側だけでアセスメントを行うのではなく、児童や保護者などを含めて原因を考えていくシステムを調べることができれば、今学校現場で行われている「チーム学校」のアセスメントの仕組みに通じるものになるのではないか。
- 「不登校の原因分析ができる」というアウトカムについては、分析するためのシステムが機能しているかどうかがとても大きいと思う。
- ロジックモデルという一つのフォーマットにまとめていくにあたって、理屈では説明できない色々な関係性や絆、児童と支援者の信頼関係などをどこまでロジックモデルに表記できるのが難しい。また、児童や保護者は支援を受ける側とするのか、それとも一緒に考えていく共同体とするのか、支援する側、される側の境界があると思うが、そのあたりの議論はもう少し必要と思う。
- アセスメントについては、児童と直接コンタクトを取りづらい面があるため、保護者やその他児童を取り巻く様々な人々を交えて分析していくという視点があるとよ

いと思う。

- 文部科学省が不登校支援の一つとして提案している「児童生徒理解・支援シート」というものがあり、これは、支援が必要な児童の色々な情報を集めてきてアセスメントし、それを小学校から中学校、中学校から高等学校へと引き継いでいけるというものだが、これを作る際は、学校だけで作るのではなく、保護者としっかりとやりとりをしてその意見を盛り込むこととされている。アセスメント機能について見る際には、支援者と児童・保護者を支援する側・される側として分けるのではなく、双方と一緒に考えたり、児童本人や保護者の意見を反映し、分析を行ったりする視点があるとよい。
- 支援というものは、支援を与えても当事者が選択しなければ支援にならないため、不登校児童本人や保護者の意向を支援策の検討に生かすという視点はとても良いと思う。支援の選択というのは最終的に当事者が行うということを押さえておく必要がある。
- 不登校への理解や不登校児童生徒向けの情報が提供されているということは重要だ。一方で児童や保護者に冊子などで情報を届けているかもしれないが、それが本当に受け止められているのかについて確認した方がよい。
- 不登校・ひきこもりの支援にかかる問題は、個別の事情が重要かつ多様なので、その問題自体は一般化しない方がよい。他方で、制度や体制の整備については、どの自治体にも共通している要素があるため、そこは拾うように分けて捉える視点を持った方がよい。具体的には運用実態を把握するものための項目か、体制整備を把握するための項目かを分けることで、どちらを重視して評価するのが見えてくる。運用実態については、マクロで考えないとならない部分とミクロの個別の事象で見なければならない部分が出てくると思うので、そうした時にミクロの点が抜け落ちているのであれば個別の関係を拾っていくことになる。体制整備については、共通して把握できると思うが、個別の事象をどこまで把握できるかを検討できるとより実態に近づくとと思う。
- 個別の対応ばかりやってもシステムとして整備できないことが多くあり、例えば情報提供を個人に対して行うには限界がある。そうしたことからネット上で関連事項が連続して見られるようにする等、情報環境を整備している自治体が増えていく。フリースクールの関係者から、児童は自分が不登校ではないかと自覚すると、

自分で検索して連絡してくるという話も聞いたことがあり、情報環境の整備は情報提供の一つの側面として非常に重要だ。情報環境の整備により相談窓口の間口が広がることで、機関間連携が当事者を通して広がっていくと思う。

- 最終アウトカムに用いられている「最適な」について、誰にとっての「最適」なのか、選択肢の中での「最適」なのか、ひっかけりはあるが、そういうことを確認したり、気になったりすることが、実は今の段階では意外と大事なのかも、継続した検討が必要だということを思い出すためにも残しておいてよいと思う。

—以上—